

# 「水」が決める企業価値

## — 水イノベーターの挑戦

奥田早希子  
編集オフィス chomo 代表

⑥

2015年のCDPウォータープログラムでAリストに選ばれたアサヒグループホールディングスは、水を原料として利用する飲料メーカーとして常に「水」の視点で事業活動を律してきた。健全な水循環とは何か。持続可能な社会とは何か。企業に何ができるのか。問い掛け続けた結果、原料の安定調達とCSRの融合に行きつき、それぞれの活動が深化し始めている。

生産者との関係を強化しなければならぬ

調達とCSRが深く関連しあうことを認識する

きっかけとなったのは、グループ各社の調達担当の責任者を集めて14年に行ったダイアログ(対話)だった。テーマは、調達活動における持続性、社会的責任とは何か。調達先企業も交えた議論の中で、参加者全員が一致した意見があった。

「持続的に調達を安定させるには、調達の川上である生産者との関係をもっと強化していかなければならない」

水は、生産者となが 門セネラルマネジャーの最も大切な要素とされ 佐田朋彦氏は、そこから

## アサヒグループホールディングス

# 「水」で深化する調達とCSR

た。飲料メーカーの使命として、とりわけ水問題には真摯に向き合ってきた同社だが「サプライチェーン上流側の農業と水との関係性については、必ずしもしっかりと意識できていませんでした」。ダイアログを通じて自社に足りないところを認識したCSR部

### 調達先選定に水リスクも考慮

ビールなら麦芽やホップ、飲料ならコーヒー豆や果汁など、同社の製品は世界各国で生産される。ダイアログを通じて多くの農産物に支えられている。よりの品質の良いものを選ばず、必要を適正な価格で、必

要な時期に入荷してもらえないか。それが調達先を選ぶ際のこれまでの基準だった。

しかし、農業には大量の水が必要とされる。そのことは、同社のサプライチェーン全体において、工場での水使用量はわずかに数%に過ぎず、ほとんどが農園で使われているというデータからも明らかだ。温暖化などの影響で、渇水や洪水など水リスクが世界各国で高

まってもいる。そこで同社は、調達先地域の希少性や、主要な7製品の原料を生産する海外59地域でのウォーターフットプリント

「調達とCSRは関係がないように思えますが、そうではありません。広く社会との接点を考え、構築していくことがCSRの役割であり、それは事業活動そのものだと考えています」

農業も水も、その地域の生活や社会の成り立ちと密接に関係している。同社は調達を通じて持続的な農業を志向することで、同時に健全な水循

追加し、現地ヒアリングの際には渇水や洪水の傾向についても調査するようになった。

「調達とCSRは関係がないように思えますが、そうではありません。広く社会との接点を考え、構築していくことがCSRの役割であり、それは事業活動そのものだと考えています」

農業も水も、その地域の生活や社会の成り立ちと密接に関係している。同社は調達を通じて持続的な農業を志向することで、同時に健全な水循

環、そして持続可能な社会をも求め続けている。水リスクに対する答えを持つる企業に

これまでの同社の水に関する取り組みは、3段階に分けられる。1段階目は自社工場の排水処理や水リサイクル、節水など。それから社会的要請

もあって、水源地の森林保全など環境活動にも力を入れるようになった。そして、今、原料生産の農業にまで目配りする第3段階に入り、視野が世界に広がった。

「ここ2、3年、海外の機関投資家からの水リスクに関する問い合わせが増えてきました。当初

は1段階目のことを答えていたのですが、彼らにとってそれはやがて当たり前のことなんです。世界的な水リスクをどう考えているのか。これからの企業は、その答えを持っていなければなりません」。

安定調達とCSRの融合によって、同社はその答えに近づこうとしている。「まだ緒に就いたばかり」ではあるが、やがて事業活動に、そして社



会に前向きなインパクトを与えるはずである。

※ウォーターフットプリント：水利用に関する潜在的な環境影響を、原材料の栽培・生産、製造・加工、輸送・流通、消費、廃棄・リサイクルまでのライフサイクル全体で定量的に評価する方法(環境省「ウォーターフットプリント算出事例集」より)。おむね食料や製品の生産のライフサイクル全体で直接的・間接的に使用された水の総量のこと。

(隔週連載予定)

筆者：奥田早希子(編集オフィス chomo 代表、東洋大学PPP研究センターリサーチパートナー。環境新聞記者を経て独立。編集企画、広報アドバイジング、執筆等)